

# 水産試験場研究評価委員会 評価のとりまとめと機関の対応方針

(中間評価)

事業名 (課題名)	漁業専管水域内資源調査 (底魚資源調査)			研究 期間	平成 16 年度～ (評価期間：令和 4～7 年度)		予算 区分	委託
研究の取扱基準 A. 計画を超えて順調（このまま研究を継続） B. ほぼ計画どおり（このまま研究を継続） C. 研究方法を修正する必要あり D. 研究を中止する必要あり								
委員名	1	2	3	4	5	6		まとめ
評価結果	A	B	A	B	A	B		A
主な意見	<p>①研究目標</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漁獲量が減少傾向にある底魚資源の持続的な利用は重要な課題であり、資源評価手法の改善と管理方策の検討は重要である。</li> <li>・海域環境変化により、底魚の資源変動は大きく、資源評価や資源管理手法の高度化は必須の課題である。</li> <li>・水産資源を持続的に利用するためには必要な目標であり、研究目標は妥当である。</li> <li>・必須の目標が設定されている。</li> <li>・資源の動向を把握する必要性を十分理解したうえで、持続可能で経済的に合理的な資源利用を研究することは妥当である。</li> </ul> <p>②研究手法の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・トラフグを対象とし、特に高齢魚の年齢組成の分解能を向上させる手法開発は資源評価の精度向上に欠かせない。</li> <li>・トラフグは本県の重要資源であり、漁獲管理に必要な手法の検討は妥当である。</li> <li>・調査体制も整備されており、研究手法は妥当である。</li> <li>・必要なデータを取得することができている。</li> <li>・毎年の漁獲データをしっかり収集し、資源状況の動態について、資源解析手法の改良を試みながら把握している。</li> </ul> <p>③計画の進捗状況</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・年齢分解数の拡張方法を開発している。また、漁獲予測を基に操業制限を取り入れ、水揚げ金額の増加を実現したことは大きな成果である。</li> <li>・トラフグの漁獲管理では、1年でその効果が発現し、業界の認識を高めることができた。</li> <li>・解析に必要なデータが着実に蓄積されており、計画どおり進捗している。</li> <li>・計画どおり進捗することができた。</li> <li>・計画どおりデータを確実に収集していると思われる。</li> </ul> <p>④研究の成果と発信</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・複数の論文発表を行っており、学術的にも認められた成果を得ている。</li> <li>・両方の研究成果とも、一定の成果が得られ、関係機関への報告や周知がなされている。</li> <li>・事業で得られた成果に基づき、現場での提案が行われており、研究成果の発信は妥当である。</li> <li>・成果を漁業現場へフィードバックし、漁業者の所得向上を果たすことができた。</li> <li>・情報発信と資源量に応じた漁獲方法が提示でき、令和 7 年度は、トラフグ資源が効率的に利用できたと思われる。</li> </ul> <p>⑤今後の計画の妥当性</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・データ蓄積や分析による年齢分解手法の精緻化と一般化が期待される。</li> <li>・他県や国での取組も踏まえて、今回得られた成果を活かせるよう引き続き研究を進めてほしい。</li> <li>・データの蓄積を重ねることで、資源管理の高度化が見込めるため、今後の計画は概ね妥当である。</li> </ul>							

- ・さらなる精度の向上を目指している。
- ・トラフグも含め底魚資源のデータの蓄積を継続し、資源変動要因を把握する必要がある。

#### ⑥総合評価（研究の取扱）

- ・トラフグの資源評価における年齢分解手法の改良に成功しており、他魚種への適用可能性の検討など発展的な研究に繋がることを期待したい。また、漁家所得の向上に向けて、単価の傾向や市場動向、操業コストなども含めたややマクロ的な視点での水揚方法の検討にも期待したい。
- ・底魚資源として、トラフグについての研究がなされ、一定の成果が得られていると思う。今後は、底魚資源としてトラフグに加え、かつて伊勢・三河湾に大量に存在したシャコ、アナゴについての調査とその資源回復の方策について検討されるよう希望する。
- ・これまで資源管理の取組は県ごとに行われてきており、資源評価の研究手法も異なっている。トラフグも複数の県で行われてきており、評価の精度を上げるためには、関係県で統一した手法の検討にも取り組んでほしい。
- ・資源量把握のための技術開発と資源の効率的利用の提案ができており、資源管理を改善できる良い成果がでている。今後も研究を継続し、トラフグ資源が持続的に利用でき、かつ漁業者が儲かるような具体的提案ができるよう期待している。
- ・漁業者の所得を向上させることができ、今後の資源管理手法の礎となる。
- ・海洋環境が激変している。今後、底魚資源については可能な範囲で魚種ごとにデータを蓄積し、環境要因と資源の動向の関連性を解明することで、科学的根拠に基づく持続可能な資源利用方法の開発につながると期待している。さらに、これにより漁業者の所得向上も図られることが期待される。

#### 機関としての対応方針

総合評価は「A」評価であり、計画を超えて順調と判断する。

本事業では資源評価の精度向上に向けた取組として、年齢分解方法の手法を改良し、資源管理上の課題に対して経済合理的な水揚方法を提案することで、漁家所得の向上につなげることができた。

今後は関係県を含めた横断的な年齢分解方法の検討を行い、資源評価のさらなる精度向上を目指すとともに、それらの結果を基に環境要因と資源変動との関係解明を進める。また、大きく変動する資源を経済合理的に利用できるよう、資源状況に応じた水揚方法の検討を行う。